

失われた三十年考

稲宮 健一

我が家には二つの掃除機がある。少し以前、掃除機と言えば、床にあるごみを吸い込むモーターがあつて、長い筒の先から床のゴミと空気を吸い込み、排気の手前に通気性のある袋を置き、ごみは袋の中へ、排気は袋を通して外部に出す。この原理は家電各社共に変わらなかった。

もう三十年も前、スタンフォード大学に客員研究員として滞在して頃、日本の電気会社の名前が表示された寄付が目立ち、日本担当の教員と名刺交換したことがある。Japan as Not が騒がれた頃だ。芝が植えられている中庭に今言う「ルンバ」と同じような形をした円形の無人ロボットが自走して芝を刈っていた。発想の原点は地雷探知だと聞いている。かの地の高級住宅街では、外庭の美観を保つため、芝刈りは義務化され、手入を怠ると指弾されるとのこと。まず、芝刈りだけで商品価値がある。これが進化して、現在のルンバは自分位置が分かり、自走した場所を記憶して、自分で掃除すべき区間を記憶している。そして、外出する時にスイッチを入れれば、帰宅時には部屋がきれいになっている。

これにたいして、ダイソン方式は吸入したごみを含む空気を円錐のコーンに入れ、コーンの半径に応じた遠心力と重力を使ってごみを分類する方法です。分類されたごみは所定のケースに収納されるので、ゴミ袋を用意する必要はない。欠点はゴミを分類する効率が悪く、比較的大きな電力を消費する。以前の掃除機の原理は各社共同で、少しの意匠や、色などで差をつけたが、今や相当な部分が海外メーカーの製品になっている。

日本では或る製品に密着して磨きをかけ、利便性や、美観を競うのが得意だが、基本原理に帰って新規な発想を興すことは得意でない。かつて、半導体メモリの世界シェアが世界一となり、半導体業界の覇権を握ったと騒ぎ立てたことがあるが、重要な役割をするのはメモリでなく、CPU、今はGPUでありその目がなかった。今や日本半導体の影は薄い。出よ、日本ブランド！